学校図書館における英語多読用図書の提供と支援の効果 —アクション・リサーチによる分析を基に—

江竜珠緒*

The Effect of Provision of English Books and Supporting the Extensive Reading Program in the School Library: Based on the Analysis of Action Research

Tamao ERYU

抄録

本稿の目的は学校図書館における英語多読用図書の提供、司書教諭による英語多読授業への支援が、学校図書館および司書教諭、英語科教諭、生徒にもたらす効果を考察することである。本稿はアクション・リサーチの研究方法を用いた2つのサイクルから構成され、2009年度から2016年度の明治大学付属明治高等学校中学校図書館における実践を対象としている。第1サイクルでは明高中図書館での英語多読用図書の排架、第2サイクルでは司書教諭による英語多読の読書支援と利用指導を実施した。そして、これらの実践に対する教諭と生徒への質問紙調査と聞き取り調査を実施し、その効果を考察した。その結果、学校図書館での英語多読用図書の提供と司書教諭による英語多読の支援には、英語科教諭と生徒が積極的な学校図書館利用者になることや、司書教諭の読書支援や授業支援における役割を明確にする効果があった。魅力ある英語多読用図書を提供することが重要であることが示唆された。

Abstract

The aim of this paper is to consider the influences of provision of English books and supporting the English Extensive Reading program have on English teachers, students, the library and the teacher librarian. This reports the practice at Meiji University Meiji High School and Meiji Junior High School from 2009 to 2016. The research was divided into two areas of Action research. The first was the provision of English books in the school library, and the 2nd considered the support required for the English Extensive Reading program. The support was provided in two stages. First, supporting the program in and out of class, such as after school. Second, by having the teacher librarian gave guidance on the program to the students. In addition, a questionnaire survey and inquiring surveys for the teachers and the students were taken to clarify the needs of the school library and the teacher librarian. As a result, by providing English books and having an Extensive Reading program with the support of the school library had two positive effects on English teachers and the students. First, it encouraged active use of the school library and second, it became clear that the role of the teacher librarian is indispensable in supporting reading and teaching support. Furthermore to promote the active use of the school library, the Extensive Reading books must match the needs of the students. In other words, they must fit the level, their interest, and the book must be of appropriate length.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral program
Graduate School of Library, Information and Media Studies
University of Tsukuba

1. はじめに

1.1 研究の背景と研究目的

英語多読とは、やさしい英語で書かれた図書を大量に読むことによって、リーディング力だけではなく、リスニング力、ライティング力などの総合的な英語力を身につける試みである。文法指導や語彙指導などをほとんど行わない点に特徴がある¹⁾。なお、英語図書を多く読む試みには、非英語圏の学習者が英語圏において英語を学ぶために実施する多読 *Extensive Reading in the Second Language (ESL)* と、非英語圏の学習者が非英語圏において英語学習のために実施する多読 *Extensive Reading in English as a Foreign Language (EFL)* の2種類があるが、本稿においては日本で実施されている EFL を対象とし、引用部分を除いては「英語多読」の用語を用いることとする²⁾。

これまでも英語科の授業内において英字新聞の記事や英語図書を読ませる試みは行われてきた。しかし、日本の英語教育全体において「多読」の意味が大きく変化したのは、1993年に酒井の『どうして英語が使えない?:「学校英語」につける薬³⁾』が刊行されてからのことである。同書では、1冊の本を読み通すのではなく、読み続けることが苦痛になった本は次々に変えながら、とにかく量だけを積み重ねていく方法が述べられている。それまでの英語学習では得られないほどの大量の英文に触れることが容易に想像される内容となっている。その後、酒井が示した「辞書は引かない」「わからないところは飛ばす」「進まなくなったらやめる」の多読三原則によって、さらに多くの英語指導者が強い影響を与えられた⁴⁾。このような日本における英語多読の導入の経緯と変遷、中等教育における英語多読に関する実践を整理、分析したものはほとんどない⁵⁾。そこで筆者は「日本の中等教育における英語多読の広がり」と実践：英語科教論と司書教諭の連携に向けて⁶⁾において、英語多読に関する文献を網羅的に収集し、日本における英語多読の歴史的背景や方法論について整理して、特に中等教育における英語多読の方法について考察した。そして、日本では酒井の多読三原則が重視されるあまりに、生徒への指導が適切に行われない危険が生じていること、中等教育においては英語科教論と司書教諭とが連携して英語多読用図書⁷⁾を所蔵し、生徒の支援を行うことが重要であることを指摘した。

私立明治大学付属明治高等学校中学校（以下、明高）では、日本において英語多読が広まり始めたのと同時期の2002年度から学校図書館に英語多読用図書を所蔵し、

2009年度から司書教諭と英語科教論とが連携して、生徒に対する英語多読の指導を行ってきた。2018年度現在では、年間100冊以上、10万語以上を読む生徒が多数おり、継続的、自発的に英語多読に取り組む生徒は年々増加している。

そこで本稿では、2009年度から2016年度までの明高中学校図書館における英語多読の実践を対象とし、学校図書館での英語多読用図書の所蔵と提供、司書教諭による英語多読への支援が学校図書館と司書教諭、英語科教論、生徒にもたらす効果について考察する。研究方法にはアクション・リサーチを用いる。

1.2 先行研究

海外の研究者による英語多読研究では、第二言語習得や語彙研究の観点から研究をまとめたクリスティン・ナットオール⁸⁾やステイブン・クラッシュン⁹⁾、ポール・ネイションとロブ・ワーリング¹⁰⁾らのものがある。また、英語多読の実践方法について詳細に取り上げたものとして、文教大学の元教員ジュリアン・バンフォードとハワイ大学のリチャード・R・デイの著書がある¹¹⁾。両者は日本の大学生に対して実施した英語多読の実践をもとに、学習者が現在の自分の習熟度よりも容易に読めるものを選ぶことで、学習がより促進されることを強調している。

日本においてははじめに述べたように、酒井が「とにかくやさしい英語の本」を「浴びるように読む」ことの重要性を訴えたことから、英語多読の実践が広まっている¹²⁾。酒井の著書は初学者向けの英語多読用図書を複数紹介している点で、学習者にとって非常にわかりやすいものとなっている。その後、大学生や社会人を対象とした英語多読に関しては、古川昭夫、西澤一など、酒井の著作に影響を受けた英語指導者たちが発足したSSS英語学習法研究会の会員を中心に、多くの実践や著作が発表されている¹³⁾。ただし、語彙研究や教授法についての論文は非常に少なく、方法論について詳細に述べたものや、実践報告が主となっている。

中等教育では、1990年以前から多読の実践報告がある。ただし盛んに行われるようになるのは1990年代半ばからのことである¹⁴⁾。このことには、1989年の高等学校学習指導要領において、科目「英語理解」の内容として、それまでの「精読」に加えて「多読」が加わったことが要因にあるとも推察される¹⁵⁾。しかし、学校図書館と英語科教論が連携して実施する英語多読については、2000年代になるまでほとんど触れられることはなかった。そのような中で、高瀬敦子が1998年から私立梅花女子高等学

校で実施した英語多読について、学校図書館に英語多読用図書を排架したことが英語多読の推進力となった事例を紹介し、学校図書館の協力が多読授業を成功に導く大きな要素の1つであると述べている¹⁶⁾。高瀬は2010年の『英語多読・多聴指導マニュアル』¹⁷⁾の中でも、多読・多聴の導入方法として、実施場所の1つに図書館をあげ、学校図書館、大学図書館利用の利点について述べている。ただし、高瀬自身が高等学校教諭から大学教員になったということもあり、中学校、高等学校、大学での英語多読実践が混在し、どこまでが学校図書館で実施されたものであるのかは明確ではない。

近年、図書館における英語多読の実践報告は増えつつあり、2014年には酒井と西澤による『図書館多読への招待』¹⁸⁾が出版された。その中では東京都立大田桜台高等学校で英語科教諭と連携して英語多読を実施していた学校司書の米澤久美子が学校図書館の役割は授業支援と資料提供だと述べている¹⁹⁾。また、西澤と米澤は2019年には『図書館多読のすすめかた』を刊行して、英語多読を支援している公共図書館、学校図書館について紹介し、その効果について述べている²⁰⁾。

1.3 研究方法

研究方法として用いたアクション・リサーチは、アメリカの社会心理学者クルト・レヴィンによって生み出された研究手法だといわれている²¹⁾。日本においては、医療、特に看護の分野で多くの研究発表がなされているほか、第二言語教育の分野における研究手法の1つとして盛んに取り入れられている。このことには、佐野英之が2000年に出版した『アクション・リサーチのすすめ：新しい英語授業研究』²²⁾の影響もあると推察される。同書は日本の英語教育におけるアクション・リサーチに関する最初の書籍であり、具体的にアクション・リサーチの定義、方法を提示している点に特徴がある。佐野は同書においてアクション・リサーチを授業研究の立場、教育改革運動の立場、理論検証の立場の3種類に大別して、歴史的な経緯を踏まえてそれぞれ解説している。

授業研究の立場とは、自らの実践を省察することを繰り返して、授業改善を行うことを第1とするものである。学校教育現場においては、多くの教諭が本能的に実施しているものと述べられている。教育改革運動の立場とは、実践者や研究者が共同で研究を行い、授業改革だけでなく、カリキュラムや教育内容、教育行政を改善しようとするものである。他教科間の連携や、異なる学年の教諭間の連携が想定されている。理論検証の立場は、ある分野で得られた理論を、実践を繰り返すことで確認す

るものである。このとき、実践は理論の従ではなく、理論と同等のものであると考えられている。この3つは相互に関連しており、いずれも現状を改善するために問題点を指摘し、対策を立て、それを実施するという点で共通している。

佐野は同書中、デイビッド・ニューマンが1993年に述べたアクション・リサーチの6プロセスについて詳細に紹介している。ここで佐野が紹介した6プロセスは、1) 問題の確定 (Problem Identification)、2) 予備的調査 (Preliminary Investigation)、3) 仮説の設定 (Hypothesis)、4) 計画の実践 (Plan Intervention)、5) 結果の検証 (Outcome)、6) 報告 (Reporting)、である。佐野は、この6プロセスを英語指導における実践例を交えながら下記の表1のように解説している。

表1 佐野正之によるアクション・リサーチの6プロセス

プロセス	実施内容
1) 問題の確定	現在自分が抱えている問題点を絞り込む。このとき、扱いやすく、具体的な成果が見やすい点に絞ることも重要。
2) 予備的調査	確定した問題について、内容を吟味する。観察や、時にはアンケートによって実態を調査して把握する。また、教諭が自分自身の指導を省察したり、文献調査を行って、問題点に対する有益な情報を集積することもここに含まれる。
3) 仮説の設定	調査結果を踏まえて、実現可能な到達目標を定め、対策を立てる。これを第1段階の目標が終了してから第2段階を考えるのか、全体像を把握した上で第1段階の目標とするのかは、問題の難易度や実践者の経験によるところが大きい。
4) 計画の実践	実際の指導を行う。このとき、自分と生徒とを客観的に見る瞬間も大切。
5) 結果の検証	結果の検証は、観察やアンケートによって、実践した計画の効果を調べる。初期の目標が達成できなかった場合にはその要因を調べ、同じサイクルを繰り返すか、不十分な点を補うことができるかの判断をして次のサイクルに進む。
6) 報告	結果をまとめて発表する。

出典：佐野正之編著『アクション・リサーチのすすめ：新しい英語授業研究』大修館書店（2000）より著者作成

兼重昇は、佐野はこのようにシステムティックな方法を用いることによって、アクション・リサーチを従来の実践研究と異なるものにしたと述べている²³⁾。つまり、佐野には手順を明確にすることで、信頼性に欠けるという批判を避ける意図もあったものと推察される。同書には、このプロセスに則したアクション・リサーチの事例が複数紹介されている。

学校図書館における教科教諭との連携授業に関しては、これまでの多くの実践報告がなされてきた。このうちのいくつかは、課題を明確化して取り組みの方法を考え、実行するというアクション・リサーチの手法に近いものもある。ただし、システムティックなプロセスに則したアクション・リサーチは、学校図書館研究においては非常に少ない。2017年に刊行された『学校図書館への

研究アプローチ²⁴⁾には、小学校、中学校、高等学校におけるアクション・リサーチを紹介しているが、問題意識から課題を設定し、対策を考えてその実践を行うという過程を明確に示して記述しているのは、塩谷京子の実践のみである²⁵⁾。本稿は6プロセスに則った記述を行う点で、これまでの実践とは異なっている。

なお、ニューマンの「Hypothesis」は「仮説の設定」と訳されるが、ここでいう「仮説」は、先行研究等から生み出されたものではなく、現場の問題点を省察し、実現可能な到達目標を定めて立てられた「対策」、実現可能性の高い計画のことである。これらは、現場に特有の金銭的、人的な状況等も加味して考えられるもののために、実践者以外には唐突に生まれたようにみなされかねない危険性がある。そこで本稿では、一般的な仮説検証型の論文と区別するために、「仮説の設定」ではなく「対策の立案」という用語を用いることとする²⁶⁾。

1.4 調査対象の概要

調査対象とした明高中は1911年に創設された、明治大学唯一の直系付属校である。2008年4月の調布移転を機に、それまでの男子校から共学化した。中学生約500人、高校生約800人、計約1,300人が学んでいる。他の国公私立大学への進学希望者を除いて、90%以上の生徒が内部推薦制度によって明治大学に進学する。

ただし、2012年度までは内部推薦基準がそれほど厳しいものではなかったため、大学進学後の付属出身生徒と一般受験生との学力、特に英語力における格差は、長年の懸案事項となっていた。そこで、2012年度に、次年度入学生（2015年度卒業生）から、高校3年次の2学期時点で、実用英語技能検定（以下、英検）2級合格、およびTOEIC® Listening and Reading Test（以下、TOEIC）450点以上の取得が必要とされることが決定した。なお、中学校から高等学校への内部進学基準にも、中学3年次の2学期時点で、英検準2級1次合格が必要とされることも決定した。そのため、高等学校1年次から3年次までの英語総単位数は24単位で、文部科学省が定めた標準単位数17単位²⁷⁾よりも7単位多く設定されている²⁸⁾。英語科教諭も増員され、専任教諭17名と非常勤講師6名が配置されるようになった。なお、明高中の専任教諭は全70名おり、英語科以外では、各教科8～11名、授業を持たない養護教諭と司書教諭が各1名となっている。

明高中図書館は校舎2階中央部に位置し、中学生、高校生の共同利用施設である。約500平方メートルの館内に和書約62,000冊、英語図書（英語多読用の図書を含む）約6,800冊を所蔵しているほか、雑誌約50タイトル、新

聞10紙を購読している。館内はすべて無線通信によるインターネット検索が可能となっており、辞書・事典検索データベースのJapan Knowledge Lib、新聞検索データベースの朝日けんさくくん、聞蔵Ⅱ、スクールヨミダスの利用も可能となっている。図書、雑誌はほぼすべてブレインテック社の情報館という図書館蔵書管理システムによって管理している。2007年度に卒業研究などの学習支援を行うために、特定教科の授業や担任業務を持たない専任司書教諭が採用された。司書教諭の教員免許取得科目は国語科である。現在は非正規で雇用年限3年の非正規職員2名を加えた計3名で運営している。司書教諭が採用されるまでは明高中図書館内での授業は場所貸しのみであったため、年間の図書館利用授業数は不明である。年間の貸出者率は60%前後であった。貸出者率とは、クラス内の生徒のうち、図書館を利用した生徒の割合で、年度末統計においては、1冊も借りていないゼロ冊者数を把握するために用いるデータである。司書教諭採用年度からは、教科の調べ学習、修学旅行準備等の授業が図書館内で実施されるようになり、貸出者率は70%以上になった。

2. 第1サイクル：2009年度～2011年度

2.1 英語力向上に関する問題

2007年度、2008年度の2年間は移転業務が主となったが、2009年度以降には通常業務に戻り、学校の教育方針を踏まえて、司書教諭として生徒たちの学力、特に英語力向上をどのように支援するかということを考える必要に迫られた。そこでこれまでの学校図書館の英語科への支援状況を検討したところ、下記の2点の問題が明らかになった。

- 1) 学校図書館にある英語多読用図書の貸出はほとんど行われていない。年間貸出冊数は10冊以下で、そのほとんどは漫画である。
- 2) 英語科教諭による授業目的での学校図書館の利用はまったくない。

2.2 英語多読の実践に関する予備的調査

英語多読の授業は、2006年度から開始されていたが、当初は3名の英語科教諭のみが実施していた。具体的には、英語科研究室に所蔵していた図書をブックトラックで教室に運び、授業時間内に何冊かの本を読ませたり、貸出記録用のノートに記入することで貸出を行うような形態である。図書館で英語多読授業を実施することはなかった。また、明高中図書館には、2002年度から、英米

の出版社が非英語圏学習者向けに出版している段階別読みもの Graded Readers²⁹⁾と英訳された漫画を中心に、約400冊が排架されていた。しかし、英語科教諭が図書館から英語多読用図書を借りて読むような課題を与えることはなかった。

2008年度には英語科が所蔵する英語多読用図書は2,500冊を超え、英語科の中で英語多読に関する勉強会も行われていた。蔵書の増加に伴って貸出・返却も増え、延滞や紛失などの問題も発生し、司書教諭に管理方法などについての相談が持ちかけられることもあった。加えて、選書に関する課題もあった。海外研究者による英語多読の研究によれば、興味深い図書を揃えるためには、英語多読の指導者が、学習者が母語で読んでいる図書を確認したり³⁰⁾、学校図書館員に学習者の好む図書について訊いてみたりすることが必要だとされている³¹⁾。日本においても、英語科教諭による選書では、教材として集めるだけであったために失敗してしまった例も紹介されている³²⁾。明高中では、当初、『英語多読完全ブックガイド』³³⁾を中心に英語科教諭が選書を実施していたが、同書に掲載されている英語多読用図書が非常に多いため、その中で何を選ぶべきかという点については問題を抱えていた。また、購入方法に関して未経験であったため、Amazon等で1冊ずつ購入していることも明らかになった。

2.3 対策の立案

以上の予備的調査から、現状の英語科の体制では蔵書管理まで手が回らないこと、英語科教諭が英語多読用図書の選書や購入に関して課題を抱えていることが明らかになった。そこで、司書教諭から英語科教諭に英語多読用図書を学校図書館内で所蔵し、配架することを提案した。先行事例がほとんどなかったため、対策の立案には、それまでの和書業務で得られた効果から、英語多読用図書を排架することで得られる効果を類推した。その際に提示した対策は以下の3点である。

1) 学校図書館で英語多読用図書を所蔵する。そうすれば、図書館の貸出が増えるだけでなく、所蔵管理および貸出・返却処理が容易になるため、英語科教諭の負担が軽減する。また、英語多読の授業が学校図書館で実施されるようになるだけでなく、自宅学習課題としての英語多読も可能になる。

2) 図書館蔵書管理システムでは、ブックリストの作成が容易であるため、そのことを英語科教諭に周知する。そうすれば、プリント課題作成などの授業支援ができるようになる。このことも英語科教諭の負担軽減

につながる。

3) 司書教諭が英語多読用図書の選書、購入に関して英語科教諭を支援できることを明示する。そうすれば、選書に関しては、生徒の好むジャンルを提案することによって、生徒が継続的に読みたくなるような本を揃えることが可能になり、また、学校図書館に和書を納入している書店から、英語多読用図書も簡便に大量購入できる。

2.4 計画の実践

英語科教諭に立案した対策を提示し、問題の解決のために学校図書館に英語多読用図書を移管して所蔵した。以下、立案した対策を具体的にどのように実践したかについて述べる。

2.4.1 対策1)の実践：英語多読用図書の所蔵と提供

2009年度から、英語科研究室内に保管されている英語多読用図書のうち、約1,600冊を学校図書館所蔵に移管した。このとき英語科教諭によるレベル分けと語数カウントも実施された。レベルと語数は色付きテープ（テプラテープ）で英語多読用図書上部に貼付した。これによって、レベル別配架を行うことができるようになっただけでなく、生徒が本を選ぶときに一目でレベルを参考にできるようになった。なお、このときに決定したレベルが表2である。

表2 明高中図書館における英語多読用図書のレベルとラベル色

Level	ラベル(色)	英検の目安	主な作品(シリーズ)
Starter	オレンジ	～4級	Hello, Clifford! / Young Cam Jansen and Dinosaur Game
Level 1	水色	3級	Frog and Toad Are Friends / Nate the Great
Level 2	黄色	準2級	Judy Moody / Can you Survive
Level 3	緑	2級	Life on the Refrigerator Door / Hatchet
Level 4	赤	準1～原書	Harry Potter / Twilight

学校図書館に英語多読用図書を所蔵することによって大きく変化したのは、英語多読の授業形態である。2010年度には、専任教諭8名、非常勤講師2名が学校図書館を利用して年間87時限の英語多読の授業を行い、2011年度には年間103時限の授業が実施された。また、授業時間内で読むことだけでなく、2週間で6,000語、月に10,000語などの自宅学習課題が出されるようになった。これによって、英語科教諭は授業時間を削らずに英語多読を実施することが可能となり、それまで一部の教諭のみが限られた学年で実施していた英語多読が、全学年で実施されるようになった。生徒にとっても、これまでは教室内で教諭が選んだ図書を読む形態で実施されていただけのものが、和書同様に学校図書館内で生徒自身

が自分の読みたい本を選んで読むことが可能になった。教諭から与えられるのを待つばかりでなく、自発的に取り組もうと思えば取り組める環境が整ったと考えられる。

2.4.2 対策2)の実践：ブックリストの作成

図書館蔵書管理システムを利用するとブックリストの作成が容易であることを英語科教諭に紹介して、実際に作成してみせた。それまで英語科では書名や著者名を書き込む読書記録用冊子のみを配布していたが、本校で所蔵している Oxford Reading Tree³⁴⁾をリスト化し、生徒がリスト横のチェックボックスにレ点を入れるだけで記録ができるプリントが作成できた。また、テーマにあわせて「犬の本リスト」や「兄弟本リスト」などを作り、やはり同じように読んだ本にレ点を入れるだけで記録できるプリントもできた。これらのプリントは、その後、読書記録用冊子に組み入れられた。

このようなブックリストの作成によって、生徒が英語多読用図書を選ぶ際の目安にすることもでき、授業内で一斉に英語多読用図書を読むのではなく、授業外に自発的に取り組むような状況を作ることが可能になった。本を読むよりも読書記録用冊子に書き込むほうが時間がかかるといふ生徒の不満を解消することにもつながった。

2.4.3 対策3)の実践：共同選書

司書教諭は日常的なカウンター作業や年末統計などを利用して生徒たちが和書で好むジャンルを把握できるため、それを英語科教諭に伝えて選書の支援を行った。英語科教諭からは、生徒たちがミステリやファンタジーを好んで読むこと、伝記、社会科学系の図書が人気であることなどは、新しい発見であったという感想が述べられた。その後、実際に、物語よりも伝記やノンフィクションを好んで借りていく男子生徒の姿も見られ、和書と同様のジャンルが好まれていることが確認された。

このように、物語に偏りがちな英語科教諭の選書と、生徒のニーズに基づく司書教諭のバランスのよい蔵書構築の差異が認められ、導入時の後も共同選書は継続されることになった。加えて、英語科教諭は個人での書籍購入経験はあっても大量の書籍を購入した経験はないため、学校図書館と契約している書店に購入予定リストを渡すだけで、多くの書籍を一度に簡便に購入できることを伝えることも、英語科教諭の支援となった。

2.5 結果の検証

2.5.1 生徒の状況

英語多読の実践を通して、学校全体の貸出者率は大幅に飛躍した。2008年度貸出者率78.6%であったものが、学校図書館で英語多読を開始した2009年度には84.0%となり、その後、2016年度の貸出者率は93.9%となっている。ただし、休み時間や放課後の生徒の様子を観察していると、読書記録用冊子にチェックを入れるためだけに英語多読用図書を借りたり、中にはまったく読んでいないのに、書名と語数だけを記す生徒、図書の裏面に記載されているあらすじだけを読んで感想を書く生徒などが散見された。

なお、2011年度末には今後の選書の参照とするため、生徒へのアンケートを実施して、生徒が好むジャンル等についての確認を行った。その結果、日本語で読んだことのある図書、映画化やドラマ可などである程度物語の筋を知っている図書が好まれることが明らかになった。司書教諭が想定していたように、和書と同様のジャンルが好まれる傾向にあるため、和書での読書傾向を把握することが、英語多読用図書の選書に役立つことが確認された。この調査結果に関しては校内の研究論文集で報告を行ったため、英語科教諭のみならず、校内の教諭に対して、明高中図書館での英語多読の実践についての周知を図ることにつながった³⁵⁾。

2.5.2 英語科教諭の状況

当初は図書館内での授業増加までは想定していなかったが、実際には図書館での英語科の授業が増加した。これは、授業において、開始10分で英語多読用図書を選び、30分読書をし、後半10分で借りるという授業形態が定着したからである。貸出や返却が可能となり、自宅学習課題が出せる状況になったからこそ、図書館内での英語多読授業が実施されることになったのだと推察される。また、図書館蔵書管理システムの利用方法を英語科教諭に周知することで、プリント作成の時間を短縮するなどの支援ができた。多忙な教科教諭にとって、図書館蔵書管理システムを用いたブックリストの作成は、これまでのExcel手入力と比較して大幅な時間短縮となった。さらに共同選書によって、物語に偏らない英語多読用図書を選書するという支援ができた。このことは、英語科教諭に司書教諭が日常的に実施している和書の選書や蔵書構築について知る機会を与えることにもなった。

ただし、英語多読用図書を積極的に読んでその内容を生徒に紹介する教諭の学年と、生徒に選ばせるだけの教諭の学年とでは、生徒の英語多読への取り組み方に差異

が生じ、課題以外ではまったく読まない生徒のいる学年も生まれていた。また、全学年で実施されるようになったために、長期休み前の課題が重複し、英語多読用図書が不足するという事態が生じて、課題の実施に無理が生じてしまうことがあった。課題の提示が遅い学年では、読みたい内容の本がないというだけでなく、難しすぎて読めないような高レベルのものしか書架に残っていない状況になってしまう場合もあった。これは、英語多読用図書の所蔵冊数不足と、英語科教諭同士で異なる学年の状況が把握できていなかったためである。

3. 第2サイクル：2012年度～2016年度

アクション・リサーチは直線的に行われるものではなく、実践を行うことで、当初の問題も変化し、「活動の螺旋の中で新たな考えの発見と修正とが常に繰り返される」³⁶⁾ものである。そこで本章では、第1サイクルを踏まえて、学校図書館活用を活性化するために行ったアクションとその結果について述べる。なお、予備調査は第1サイクルの結果に相当するために割愛する。

3.1 授業支援に関する問題

第1サイクルの結果から、生徒の中にはまったく読んでいないのに、書名と語数だけを読書記録用冊子に記す生徒が存在すること、英語科教諭の取り組み方法に差異が生じていること、英語科教諭間での情報共有ができていないことが課題として考えられた。

そこで、学校図書館として、英語多読の支援がこのままでよいのかということ省察した結果、以下のような問題点が見えてきた。

- 1) 英語多読に関して、司書教諭は生徒に図書を推薦したりするなどの読書支援を行っていない。
- 2) 英語科教諭の授業に関しては英語多読のための場所貸しが中心で、司書教諭が授業に関わっていない。

3.2 対策の立案

これらのことから、和書を用いた他教科教諭の授業と同様に、英語多読においても司書教諭による生徒の読書支援および英語科教諭の授業支援が必要であること、そのためには司書教諭に英語多読用図書についての知識が求められることなどが明らかになった。そこで、以下の対策を立案した。

- 1) 司書教諭が英語多読用図書を熟知する。そうすれば、英語多読授業内や放課後等において生徒へ読書支援が可能となる。

- 2) 高校1年次に実施する学校図書館オリエンテーションを英語の授業内に実施する。そうすれば、英語多読に学校図書館が関わっていることを生徒や英語科教諭に周知することができる。

3.3 計画の実践

3.3.1 対策1) の実践：英語多読用図書を熟知した読書支援

司書教諭として和書同様に英語多読用図書に関する知識を得ることが重要であると考えた。これまでも『英語多読完全ブックガイド』³⁷⁾などに掲載されている書誌情報から、有名シリーズに関してはおおよそのあらすじを知ってはいたが、Starterレベルの英語多読用図書を実際に読んだことはほとんどなかった。そこで、英語多読用図書のうち、Starterレベルの英語多読用図書300冊程度、Level1の英語多読用図書100冊程度を読了した。その他、シリーズに関しては、レベルを問わず、必ずシリーズ内の1冊は読むようにした。これまで読んでいたLevel3、Level4の英語多読用図書と合わせると、500冊以上の英語多読用図書を読了したことになった。これによって、出版社ごとの違いや作家による特徴を捉えることができるようになった。図書館内での英語多読授業において司書教諭が関わるのは、生徒たちが本を選ぶ開始直後の10分間と、後半の貸出手続きである。英語多読用図書に関する知識を得たことによって、前半の10分間で、どの英語多読用図書を読めばいいのか迷っている生徒に個別対応ができるようになった。また、学期に数度、クラス全体に対して数冊の図書を紹介できるようにもなった。司書教諭がこのように英語多読授業に関わるようになったため、休み時間や放課後に、どの本を読めばいいのかという相談をする生徒が増加した。

このような読書支援は、生徒のみではなく、英語科教諭に司書教諭に対する信頼感を与えることにもつながった。英語多読用図書は英米の幼児、小学生向けの図書が多いため、英語科教諭であっても、それほど多くの冊数を読んだことのない教諭のほうが多い。そのため、司書教諭の英語多読用図書に対する知識が、生徒へのアドバイスに迷っていた英語科教諭を支援することになったからである。生徒のレベルにふさわしい英語多読用図書に関するレファレンスを受けるようになったり、原書購読用テキストの選書に関する相談を受けるようになった。

3.3.2 対策2) の実践：英語授業内での年度度初めオリエンテーションの実施

これまでホームルームや国語の時間内で実施していた

高校1年次対象の年度初めオリエンテーションを、英語科の授業内で実施するようにした。ここでは、和書の一般図書、参考図書などの排架場所の説明に加えて、英語多読用図書も含めた排架場所を説明し、貸出冊数や期限、OPACの利用法などについての説明を行うことにした。また、和書と同様、明高中図書館での人気図書などを紹介することも行った。

このように英語科授業の中でオリエンテーションを実施することは、生徒にとっては和書も英語多読用図書も、同じように司書教諭に相談できるという意識を植え付けることにもなった。特に他の中学校から明治高校に入学してきた生徒にとって、司書教諭がどのような存在であるかということ伝えるよい機会となった。また、英語多読の開始時に統一したオリエンテーションが実施されることで、英語科教諭の英語多読指導経験の有無による違いがなくなることもなった。加えて、司書教諭にとっても、これまでオリエンテーションの時間を確保するために、高校1年次の担任教諭や国語科教諭に交渉しなければならなかったところを、確実に英語科教諭から1時限与えられることは負担軽減となった。

3.4 結果の検証

第2サイクルで行ったこれらの実践が英語科教諭、生徒、学校図書館に与えた効果について検証するため、教諭および生徒への調査を実施した。英語多読は主に高校で実施されていたため、高等学校の英語科教諭と生徒を対象としている。第2サイクルで実施した読書支援とオリエンテーションは、第1サイクルにおける学校図書館での英語多読用図書の所蔵が前提となっているため、第1サイクルに関係する質問も実施している。

3.4.1 英語科教諭への調査

明高中で高校生を担当している専任の英語科教諭6名に対して、聞き取り調査を実施した。調査期間は2016年10月下旬から11月下旬にかけての約1か月間、調査対象者は英語多読を中心になって推進してきた英語科専任教諭と、高校1年生から高校3年生までの英語科専任教諭5名である。通常、各学年2名以上の専任教諭が配置されるが、高校2年生は専任教諭1名が産休だったため、専任教諭は男性1名のみとなっている。その他の学年は男女1名ずつ2名の専任教諭が配置されている。英語多読推進担当教諭は、過去2年間、高校で英語多読を実施していたが、調査を実施した2016年度当時は中学生のみを担当し、高校生の担当はしていない。そこで、総合的に英語多読の推進を実施してきた教諭をAとし、その

他の教諭には担当学年を記した。表3は調査対象者の性別、経験年数、英語多読の実施場所である。担当教諭が2名いる学年は、a、bの区別をつけた。調査方法は半構造化インタビューである。

表3 聞き取り調査対象教諭

名称	性別	調査日	経験年数	実施場所
A	女性	11月28日	17年	教室
高1a	女性	10月20日	13年	図書館
高1b	男性	11月9日	10年	教室
高2	男性	11月24日	10年	教室
高3a	女性	11月10日	8年	図書館
高3b	男性	11月10日	35年	図書館

調査にあたっては、1) 学校図書館での英語多読用図書所蔵の利点、2) 学校図書館内と教室内での英語多読指導の比較、3) 英語多読による教諭と生徒の学校図書館や司書教諭に対する認識の変化という3つの観点を設定した。

1) と2) は、第1サイクルのアクションを検討するもので、3) は、第2サイクルのアクションを検討するために設けたものであり、英語科教諭が司書教諭からの支援をどのように実感しているか、それが授業の増加につながったかということについて質問した。

3.4.1.1 学校図書館での英語多読用図書所蔵の利点

明高中図書館が英語多読用図書を所蔵して排架していることに関しては、英語多読授業の実施が図書館内か教室なのかを問わず、利点があると述べられた。もっとも大きな利点だと考えられていたのは、所蔵管理、貸出処理の簡便さである。また、図書館という場に自然に和書と英語の図書が並んでいる状況のもたらす効果をあげた教員も複数いた。「読書自体に興味を持ってもらうという意味で、図書館にあることが望ましい」(高1b)、「図書館は、生徒の好奇心を喚起する図書にあふれている。英語多読用図書も図書館にあることが望ましい」(高3b)などの意見があった。「和書を借りるついでに英語多読用図書を借りたり、英語多読用図書を借りるついでに和書を借りたりすることで、和書、英語多読用図書の区別なく読書活動が活発化する」(A、高1a、高3a、高3b)と述べた教諭も複数いた。休み時間や放課後での利用は、他学年が何を借りているのかを見る機会にもなり、それが刺激になっていたとした教諭もいた(A)。

3.4.1.2 学校図書館内と教室内での英語多読指導の比較

英語多読を図書館内で実施している教諭からは、図書館内で英語多読を実施する利点として、「授業時間内に、読み終えたら次の図書にしたり、すぐに替えたりするこ

とができる」(高1a、高3b)など排架している多くの図書の中から生徒が自由に図書を選ぶことができる点が利点としてあげられていた。また、「図書館内で授業を実施することで、図書館の利用法が身に付き、読書習慣につながる効果があるので図書館利用を選択している」(高1a、高3b)と述べた教諭も複数いた。明高中図書館の特徴である開放感のある雰囲気よさをあげた教諭も複数いた。

一方、教室内での実施や自習課題としてのみ与えている教諭からは、「自分のレベルよりも難しい図書を読もうとするなど、図書の選択を間違える生徒がいる」(高1b)ことが課題としてあげられた。「教室での実施の場合には、教諭が選択した中から生徒に選ばせるので、ミスがない」(A、高1b)という意見もあった。しかし一方で、図書を選ぶことも学習だとして、「たとえ間違っても、自分自身で選ぶ経験を繰り返すことが大切だ」(高1a)という理由から、図書館利用を選択している教諭もいた。

そのほか「図書館は教室よりも大きな空間であるため、生徒のコントロールが難しい。教室のほうがコントロールしやすい」(高1b、高2)ということも指摘された。「教室実施の場合には1時限の授業中に英語多読以外の指導を組み入れることができる」(A、高2)として、そのことを教室実施の利点と考えている教諭もいた。

その他、教諭によって違いが生じていたのは、英語多読の効果、中でも英語力向上についてである。実施場所を問わず、「効果がある」(A、高1a、高3a)と力強く述べる教員と、「やらないよりはやったほうがいい」(高1b、高2)と考えている教員との違いがあった。ただし、英語多読の効果として、好奇心の向上、モチベーションの向上・維持、リーディング・スタミナをつける、英語に対する慣れ、読書習慣を身につける、達成感を得られるなどについては、全員の英語科教諭が共通して効果があると述べていた。

なお、明高中は図書館が校舎中央にあるため、移動時間に関しては特に問題視されておらず、教室で授業を実施することの理由にはならなかった。

3.4.1.3 英語多読実施による司書教諭や学校図書館に対する認識の変化

司書教諭からのアクションを実感したものとしては、「英語多読をやり始めた時にはわからなかったが、だんだん司書教諭の協力体制や、図書館の利用法がわかってきた」(高1a)と述べた教諭がいた。ほかにも「困ったときには司書教諭が助けてくれると思えるので、一緒に

授業ができる」(A、高3a)「司書教諭が協力してくれるので、図書館で授業をしようという気持ちになる」(高1a)、などの意見があった。このように、英語多読をしたことによって、司書教諭の支援体制が見えてきたために、連携授業をするようになったことが述べられていた。そして、実際に連携授業をした後は、「自分が足りない部分を司書教諭が補ってくれるので、授業がやりやすい」(A、高1a、高3a)と感ずるため、さらに連携授業をする機会が増えている。司書教諭からのアクションが肯定的に受け止められていた。また、英語多読を図書館内で実施している教諭からは、「生徒だけでなく、自分自身も図書館に足を運ぶ回数が増えた」(A、高1a、高3a、高3b)と、授業以外でも図書館との関りが深くなったことを実感していた。司書教諭による英語多読オリエンテーションに関しても、「慣れない教諭にとってはありがたい」(A、高2)と肯定的にとらえられていた。

司書教諭は複数学年の英語多読授業に参加しているため、司書教諭をハブにすることで英語科教諭間の情報共有ができるという意見もあった (A)。

3.4.2 生徒への調査

アクション・リサーチにおいては、教諭側の実践が生徒にも実感できているのかというフィードバックを得ることも必要になる。特に、授業実践においては、生徒が教諭による指導の効果を実感しているかという点は重要な点である。そこで、これまでの実践および教諭への聞き取り調査で得られたものが、生徒にどのようにとらえられているのかということを検討するために、質問紙調査および聞き取り調査を行った。

3.4.2.1 生徒への質問紙調査

2016年11月22日～25日までの間に、高校生全員計810名を対象に質問紙調査を実施した。複数日に渡ったのは、学年行事を実施した学年などもあり、同一日での調査が不可能だったからである。高瀬の『英語多読・多聴指導マニュアル』³⁸⁾および教諭からの聞き取り調査を基に、学校図書館内での英語多読と教室内での英語多読の違い、図書館で英語多読用図書が所蔵、提供されていることに利点を感じているか、図書館利用に変化が生まれたかという点について質問を行った。

回答者数は、当日の欠席者や長期留學生などを除く高校1年生全292名中285名(男子164名、女子120名)、高校2年生全280名中262名(男子152名、女子108名)、高校3年生全238名中207名(男子108名、女子95名)、計754名(男子462名、女子348名)であり、総人数中の

93%の生徒が回答した。表4は生徒への質問紙調査の回答者数とその内訳である。

表4 生徒への質問紙調査の回答者数

学年	高校1年生	高校2年生	高校3年生	合計人数
全体回答者数	285	262	207	754
学校図書館内の英語多読経験者	263	219	202	684
教室内の英語多読経験者	193	113	126	432

図書館での英語多読について回答したのは684人、教室での多読について回答したのは432人である。英語科教諭によって指導方法が異なるため、図書館で授業として英語多読を実施したことがない生徒や、教室での英語多読をしたことがない生徒もいる。回答数の差はそのためが生じたものである。また、明高中は中高一貫校であるが、高校から130名程度の受け入れも行っているために、中学校のときには図書館での英語多読を実施していたが高校では教室でのみ実施している場合、生徒の回答に異なりが生じたものと思われる。

表5、表6は、各学年の英検、TOEIC 取得状況である。

3.4.2.1.1 学校図書館での英語多読用図書所蔵の利点

表7は、明高中学図書館に英語多読用図書が配架されていることについての質問とその回答である。

82%の生徒が「本の貸出・返却がかんたんにできる」と回答していることから、貸出・返却が簡単にできることが高く評価されていることがわかった。これは聞き取り調査で英語科教諭が述べていたことを裏付けている。

また、「日本語の本を借りに来たついでに英語の本を借りることができる」「英語の本を借りに来たついでに日本語の本を借りることができる」と感じている生徒もそれぞれ62%、58%で、半数以上の生徒が和書、洋書が混在していることを便利だと考えているが、あまり当てはまらないと考えている生徒も全体の30~40%程度いる。英語科教諭は生徒たちがついでに本を借りるのではないかと想定していたが、10分休みなど短い時間では、和書か英語多読用図書か、どちらかを探して借りるだけの時間しかないことも推察される。

図書館内で英語科教諭や司書教諭に本を勧めてもらえることを評価している生徒はそれほどおらず、「当てはまらない」「あまり当てはまらない」と答えた生徒が、英語科教諭54%、司書教諭47%となっている。むしろ、「ひとりでゆっくりと本を選ぶことができる」75%と、自分自身で選ぶことができる空間としてとらえている生徒が

多くいた。「友だちと一緒に来て、おすすめ本を教えてもらったり、教えたりすることができる」では「よく当てはまる」「だいたい当てはまる」とした生徒が54%おり、同級生から本を勧めってもらうこともある。英語科教諭は、他学年がレベルの高い本を借りる姿を見ることが学習意欲の向上につながると考えていたが、「ほかの人が借りている姿を見て、自分もやる気になる」と感じている生徒は、「当てはまらない」「あまり当てはまらない」が60%であったことから、実際にはそれほどの影響力はなかったものと推察される。

3.4.2.1.2 学校図書館内と教室内の英語多読授業の比較

表8、表9は、図書館内で実施する英語多読授業と、教室内で実施する英語多読授業の違いについての質問とその回答である。

「集中して読むことができる」に関しては、「よく当てはまる」「だいたい当てはまる」の合計が図書館は72%、教室が55%となり、「リラックスして読むことができる」は図書館が70%、教室が50%である。図書館の方が、集中し、リラックスして読む場所として認識されている。

また、「自分に合ったレベル、語数の本を読むことができる」に関しては、図書館85%、教室70%、「自分の読みたい本を選んで読むことができる」は図書館75%、教室52%となっている。図書館がとくに評価されているのは、「自分の読みたい本」を選べる点にある。これは、高瀬³⁹⁾が図書館内では「本の選択・変更が自在にできる」「多種多様な本に出会える」と述べたことを裏付けている。

本校では学校の中心に図書館が設置されているということもあり、「移動が面倒なので教室の方がよいと思った」とした生徒は、33%、「当てはまらない」「あまり当てはまらない」とした生徒は59%で、英語科教諭と同様、生徒も図書館までの移動を苦にしていないことが明らかになった。

3.4.2.1.3 英語多読実施による司書教諭や学校図書館に対する認識の変化

表10は、英語多読によって司書教諭や図書館に対する認識が変化したかについての質問とその回答である。

「英語多読用図書の貸出・返却のために図書館に行くようになった」ことについて、「よく当てはまる」「だいたい当てはまる」と感じている生徒は47%で、「当てはまらない」「あまり当てはまらない」と感じている生徒は58%である。ただし、2.5.1で述べたように貸出者率が増加した事実はある。このことから、これまであまり

表5 実用英語技能検定 合格状況 (n=754)

	英検3級以下	英検準2級	英検2級1次	英検2級	英検準1級1次	英検準1級以上	無回答	合計
高1	12 (4.2%)	76 (26.7%)	21 (7.4%)	167 (58.6%)	1 (0.4%)	4 (1.4%)	4 (1.4%)	285
高2	6 (2.3%)	22 (8.4%)	12 (4.6%)	207 (79.0%)	2 (0.8%)	4 (1.5%)	9 (3.4%)	262
高3	2 (1.0%)	1 (0.5%)	1 (0.5%)	190 (91.8%)	1 (0.5%)	7 (3.4%)	5 (2.4%)	207

表6 TOEIC 点数取得状況 (n=754)

	350点以下	355~400点	405~450点	455~500点	505~550点	555~600点	605~650点	650点以上	受けていない	無回答	合計
高1	2 (0.7%)	7 (2.5%)	5 (1.8%)	10 (3.5%)	5 (1.8%)	9 (3.2%)	2 (0.7%)	5 (1.8%)	237 (83.2%)	3 (1.1%)	285
高2	16 (6.1%)	43 (16.4%)	56 (21.4%)	62 (23.7%)	36 (13.7%)	21 (8.0%)	10 (3.8%)	14 (5.3%)	1 (0.4%)	3 (1.1%)	262
高3	1 (0.5%)	0 (0.0%)	5 (2.4%)	52 (25.1%)	53 (25.6%)	37 (17.9%)	26 (12.6%)	29 (14.0%)	0 (0.0%)	4 (1.9%)	207

表7 明高中図書館に英語多読用図書が排架されていることの効果

	よく当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	わからない	無回答	回答者合計
本の貸出・返却がかんたんにできる	355 (47.1%)	267 (35.4%)	46 (6.1%)	22 (2.9%)	57 (7.6%)	7 (0.9%)	754
日本語の本を借りに来たついでに英語の本を借りることができる	233 (30.9%)	231 (30.6%)	136 (18.0%)	71 (9.4%)	77 (10.2%)	6 (0.8%)	754
英語の本を借りに来たついでに日本語の本を借りることができる	221 (29.3%)	221 (29.3%)	152 (20.2%)	75 (9.9%)	74 (9.8%)	11 (1.5%)	754
英語の先生から本をすすめてもらうことができる	77 (10.2%)	168 (22.3%)	219 (29.0%)	187 (24.8%)	94 (12.5%)	9 (1.2%)	754
司書教諭から本をすすめてもらうことができる	108 (14.3%)	181 (24.0%)	196 (26.0%)	155 (20.6%)	105 (13.9%)	9 (1.2%)	754
ひとりでゆっくりと本をえらぶことができる	243 (32.2%)	321 (42.6%)	100 (13.3%)	40 (5.3%)	42 (5.6%)	8 (1.1%)	754
友達と一緒に来て、おすすめ本を教えてください、教えたりすること	159 (21.1%)	250 (33.2%)	174 (23.1%)	85 (11.3%)	78 (10.3%)	8 (1.1%)	754
他の人が借りている姿を見て、自分もやる気になる	55 (7.3%)	169 (22.4%)	238 (31.6%)	210 (27.9%)	73 (9.7%)	9 (1.2%)	754

表8 学校図書館での英語多読について

	よく当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	わからない	無回答	回答者合計
集中して読むことができる	163 (23.8%)	325 (47.5%)	143 (20.9%)	33 (4.8%)	20 (2.9%)	0 (0.0%)	684
リラックスして読むことができる	163 (23.8%)	314 (45.9%)	135 (19.7%)	52 (7.6%)	20 (2.9%)	0 (0.0%)	684
自分に合ったレベル、語数の本を読むことができる	226 (33.0%)	353 (51.6%)	68 (9.9%)	14 (2.0%)	21 (3.1%)	2 (0.3%)	684
自分の読みたい本を選んで読むことができる	209 (30.6%)	303 (44.3%)	106 (15.5%)	40 (5.8%)	24 (3.5%)	2 (0.3%)	684
移動が面倒なので教室の方がよいと思った	92 (13.5%)	135 (19.7%)	196 (28.7%)	206 (30.1%)	53 (7.7%)	2 (0.3%)	684

表9 教室での英語多読について

	よく当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	わからない	無回答	回答者合計
集中して読むことができる	64 (14.8%)	174 (40.3%)	134 (31.0%)	40 (9.3%)	20 (4.6%)	0 (0.0%)	432
リラックスして読むことができる	60 (13.9%)	156 (36.1%)	149 (34.5%)	40 (9.3%)	24 (5.6%)	3 (0.7%)	432
自分に合ったレベル、語数の本を読むことができる	85 (19.7%)	218 (50.5%)	84 (19.4%)	18 (4.2%)	24 (5.6%)	3 (0.7%)	432
自分の読みたい本を選んで読むことができる	68 (15.7%)	155 (35.9%)	136 (31.5%)	42 (9.7%)	29 (6.7%)	2 (0.5%)	432
先生が選んできた本は自分のレベルに合っているので読みやすい	68 (15.7%)	180 (41.7%)	79 (18.3%)	36 (8.3%)	66 (15.3%)	3 (0.7%)	432

表10 英語多読による司書教諭や学校図書館に対する認識の変化

	よく当てはまる	だいたい当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない	わからない	無回答	回答者合計
英語の本の貸出・返却のために図書館に行くようになった	134 (17.8%)	220 (29.2%)	188 (24.9%)	175 (23.2%)	32 (4.2%)	5 (0.7%)	754
英語多読をするようになって、日本語の本を読まなくなった	38 (5.0%)	88 (11.7%)	225 (29.8%)	344 (45.6%)	53 (7.0%)	6 (0.8%)	754
英語多読を借りるようになって、ついでに他の本(和書)も借りるようになった	50 (6.6%)	128 (17.0%)	234 (31.0%)	293 (38.9%)	44 (5.8%)	5 (0.7%)	754
課題があると学校図書館に足を運びやすい	197 (26.1%)	309 (41.0%)	113 (15.0%)	97 (12.9%)	31 (4.1%)	7 (0.9%)	754
学校図書館は日本語の本だけではなく、洋書についてや、学習に関する本についても教えてくれるところだと思う	133 (17.6%)	313 (41.5%)	140 (18.6%)	84 (11.1%)	76 (10.1%)	8 (1.1%)	754

図書館を利用していなかった生徒は英語の本を借りるために来館するようになり、もともと図書館をよく利用していた生徒は変化をそれほど実感していないということが推察される。他校では日本語の本の貸出数が増えたという報告⁴⁰⁾があるが、明高中においては冊数として和書が増加した事実はない。むしろ減少傾向にあるように感じていたが、「英語多読をするようになって、日本語の本を読まなくなった」については、76%の生徒が「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と答えており、英語多読の課題が和書での読書に悪影響を及ぼすことはなかった。なお、図書館を「英語の本を借りに来たついでに日本語の本を借りることができる」場としてとらえている生徒が58%いたが、「英語多読を借りるようになって、ついでに他の本(和書)も借りるようになった」生徒は24%で、便利な場所としての認識はあるが、実際の行動としては英語多読用図書を借りるのみのようであった。課題があると学校図書館に足が運びやすいと答えた生徒は「よく当てはまる」「だいたい当てはまる」で67.1%おり、教諭から与えられた課題があると図書館に足を運ぶ生徒が増加することも確認された。図書館を和書の置き場所というだけではなく、英語多読用図書や学習について教えてくれる場としてとらえているかという質問に関しては、70%の生徒が、図書館を和書の利用場所としてだけでなく、英語多読用図書を用いた学習の場ととらえていた。

3.4.2.2 生徒への聞き取り調査

2016年11月下旬から12月上旬の約2週間、高校生15名を対象に聞き取り調査を実施した。調査対象としたのは英語多読の貸出冊数が4月から10月末までの段階で20冊以上の生徒であり、もっとも多い生徒は136冊、もっとも少ない生徒でも20冊である。冊数が少なくても語数の多い本を読んでいる生徒もいるため、一概に冊数だけで

英語多読を目的とした英語多読用図書の読書量が多いとはいいがたい。ただし、貸出冊数が多いことは図書館の中で英語多読用図書に触れ合う時間が多いことにつながるため、今回は冊数によって調査対象者を決定した。調査方法は半構造化インタビューである。生徒には事前に質問紙調査に関する追加調査であることを伝え、図書館で実施する英語多読と教室で実施する英語多読との違い、英語多読の効果等について質問した。

表11 聞き取り調査対象生徒

No.	学年	性別	調査日	英語多読貸出冊数	英検	TOEIC	出身中学
高1女a	高1	女子	11月26日	43	2級	未受験	明治中学
高1女b	高1	女子	12月5日	25	2級	535	明治中学
高1女c	高1	女子	12月5日	25	なし	未受験	公立中学
高1女d	高1	女子	11月24日	23	2級	未受験	明治中学
高1女e	高1	女子	11月22日	20	2級	未受験	明治中学
高1女f	高1	女子	12月5日	20	2級	未受験	公立中学
高1女g	高1	女子	12月5日	20	2級	595	公立中学
高1女h	高1	女子	12月15日	20	2級	未受験	明治中学
高1男a	高1	男子	11月30日	111	2級1次	未受験	明治中学
高1男b	高1	男子	11月30日	20	2級	未受験	明治中学
高2女a	高2	女子	11月22日	25	2級	405	公立中学
高2女b	高2	女子	11月21日	20	2級	355	公立中学
高2男a	高2	男子	11月28日	71	2級	440	公立中学
高3女a	高3	女子	11月22日	136	準1級	615	明治中学
高3女b	高3	女子	11月10日	47	2級1次	560	公立中学

調査対象者は表11のとおりである。2016年11月現在の明治高等学校在籍者は、747名中男子424名、女子323名で、男子55%、女子45%と男子の比率の方が高いが、英語多読を熱心に行っている生徒は女子生徒の方が多いため、調査対象者も女子の方が多くなった。

3.4.2.2.1 学校図書館での英語多読用図書所蔵の利点

明高中図書館が英語多読用図書を所蔵して排架していることについては、すべての生徒が便利だと実感していた。特にジャンル、レベルの幅広さに関しては、生徒全員が気づき、授業中だけでなく、さまざまな本の中から自分で選ぶことができる点が評価されていた。所蔵冊数が多いために「自分では本が探せず、なにを読んでいいのかわからない」と述べた生徒もいたが、それらの生徒は、その場合には司書教諭に相談すると適切な本を与えてくれるので困ることはないとも述べていた(高2男

a、高2女b、高3女b)。書店と比較して、明高中図書館の英語多読用図書の幅広さを評価した生徒もいた(高1女h)。また、いつでも自由に利用できることに関しても全員が評価していた。英語多読をきっかけに来館して、他の本を借りることが増えたと述べた生徒もいた。これまで授業課題以外の和書は読まず、「本は嫌いだった」(高2男a、高3女b)と口にする生徒が2名いた。この2名は「いまでは気になる本を読むようになった」(高3女b)、「読書が嫌いではなくなった」(高2男a)というように述べ、英語多読によって、和書も読むようになったと述べていた。和書では新書程度の本を読むことを求められるが、英語多読では絵本程度の本でも認められるために、簡単な本を読んでいるうちに読むこと自体が楽しくなったからである(高2男a)。この高2男子は、英語多読を始めてから和書に関しても非常に多くの本を読むようになった。

3.4.2.2.2 学校図書館内と教室内での英語多読指導の比較

図書館での英語多読と教室での英語多読に関しては、意見が二分する部分があった。それは、図書館の方が集中できるのか、教室の方が集中できるのかという部分である。

教室実施のほうが好きだと述べた生徒は、「休み時間に図書館で本を読むのは好きだが、授業で図書館を利用するのはあまり好きではない」(高1女h)と、日常的にはよく図書館を利用しているが、授業での利用へは拒否感を示していた。その理由としては、「図書館に来たことでおしゃべりをする他の生徒が気になる」(高1女b、高1女h)、「読みたくない気分ときもあり、集中できない」(高1女b、高1女e)など、状況が変わったことで、自分自身も他の生徒も集中できないことがあるからである。

一方、「図書館では静かにという雰囲気があるので、より集中して読める」(高1女a、高1男b、高1女f)や、「図書館には教室とは違う新鮮さがある」(高1女g、高3女b)など、図書館の方が静かで集中できるとした生徒もいた。また、「図書館には本が多いので、自分の読みたい本を選べる」(高1女a、高1女d、高3女a)、など、図書館での英語多読授業の実施を評価する意見があった。教室では限られた本の奪い合いになって読みたい本が読めなかったり、教員が選んだ本しか読めないからである。教室での授業実施を評価する意見はなかった。

英語多読の効果、特に英語力向上に関しては、実施場所を問わず全員が感じていた。英語科教諭が考えていた好奇心の向上、モチベーションの向上・維持、リーディ

ング・スタミナをつける、英語に対する慣れ、読書習慣を身につける、達成感を得られるなどについては、全員の生徒が同様のことを述べていた。また、「初見問題でもすんなり解けるようになった」(高1女d、高3女b)や、「長文問題が得意になった」(高1女h)など、実際の英語力向上を実感している意見があった。さらに、点数が上がったこととしては実感できていないまでも読む速度が上がったことを実感し、そのために長文読解問題の解答が楽になったとする生徒が複数いた(高1男a、高1女c、高2男a)。公立中学出身者では、これまで長文問題はただ眺めているだけで、読んで理解することができずにいたが、英語多読を始めてから読んで理解することが容易になったと述べた生徒もいた(高2女a、高2女b)。

3.4.2.2.3 学校図書館、司書教諭に対する認識の変化

これまで図書館に来館することがなかった生徒のほうが、より強く図書館に対する意識の変化を感じていた。例えば、英語多読用図書を借りるために頻繁に図書館に来るようになって、図書館が学習や読書に役立つ場であると知ったため、図書館に興味を持つようになったと述べた生徒(高1男a、高1女d、高3女a、高3女b)や、中学時代には授業課題の調べ学習でしか利用していなかったが、いまは読書のために利用するようになったという生徒(高1女f)がいた。また、教室での人間関係から逃れるための場所として図書館を利用してもよいことがわかったと述べた生徒もいた(高2男a)。このような変化は図書館に来る機会の増加から生まれているために、もともと図書館をよく利用していた生徒は、利用方法や図書館に対する意識に変化がないとしていた(高1女a、高1女h)。

4. 結論

本稿では、学校図書館での英語多読用図書の所蔵と提供、司書教諭による英語多読への支援が学校図書館と司書教諭、英語科教諭、生徒にもたらす効果について考察することを目的とし、2009年度から2016年度までの明高中図書館における英語多読のアクション・リサーチをもとに検討を行った。

英語多読実施による英語科教諭、生徒、学校図書館および司書教諭への効果を考察したものが表12である。

第1サイクルにおいては、英語科教諭の負担減少と、図書館の活性化がもっとも大きな効果であった。生徒にとっては、図書館に英語図書が排架されることで、自由

に本を選んで借りられるということが大きな利点だと考えられていた。

第2サイクルでは、連携授業が実施され、司書教諭との信頼関係が構築されるようになった。その結果は、英語科教諭だけでなく、司書教諭にとっても業務負担の軽減をもたらした。また、英語科教諭と司書教諭が授業における協働行為を通して同僚性を高め、教授チームの一員としての一体感を形成できるようになったことは、司書教諭にとって大きな利点となった。生徒にとっては、すでに読書習慣がついている生徒は特に変化を感じていないが、読書習慣や図書館利用習慣のなかった生徒では、英語多読をきっかけにして和書を読むようになったり、学校図書館が読書や居場所として利用できることに気がついて、積極的に利用するようになった事例もあった。これらの効果は、英語多読を所蔵するという第1サイクルのアクションがなければ得られなかったものである。このことは、学校図書館が和書だけでなく、適切で魅力的な英語多読用図書を所蔵して提供することの重要性を示唆していると推察される。

5. おわりに

英語多読を継続することは、モチベーションの向上や達成感などという心理的な効果はもちろん、生徒にとっては長文への抵抗感をなくし、速読ができるようになるなど学力的にも効果があるものと実感されている。生徒の英語力向上のためにも、図書館として今後も英語多読に対する支援を継続していくことが重要である。そのとき、生徒や教諭が足を運びたいような蔵書を構築していくためには、共同選書のあり方や、排架方法などについて、さらに検討していく必要がある。また、佐野はリサーチが集積されれば、そこに共通のパターンが現れ、理論として一般化できるのではないかと述べている⁴¹⁾。おそらくそれは、本校での英語多読の実践の積み重ねにも同じことが言えるであろう。アクション・リサーチは、抽出した課題と仮説、解決策を他の実践者と共有することが重要である。今後はリサーチを積み重ねることで自校の問題を解決するだけでなく、実践から生まれた理論を一般化して示していきたいと考えている。

謝辞

調査の実施にあたり、明高中の英語科教諭および生徒たちには多くのご協力を頂きました。ここに深く感謝申し上げます。また、本稿をまとめるにあたり、筑波大学

図書館情報メディア系平久江祐司教授にご指導とご助言をいただきました。御礼申し上げます。

表12 英語多読実施による英語科教諭、生徒、学校図書館および司書教諭への効果

	アクションによる変化	実施以前	実施後	
第1サイクル	英語科教諭	選書	英語科教諭のみ。物語中心	司書教諭との共同選書。物語以外の英語多読用図書の増加
		購入	ネット書店から1冊ずつ購入	図書館契約書店から一括購入
		蔵書管理	管理方法に困難を感じている	データ管理による負担軽減
		来館数	個人的な読書や教材研究のためのみに来館	これまで以上に増加
		授業実施	なし	図書館内読書の実施
		授業用プリントの作成	Excelによる手入力で作成	図書館蔵書管理システムを利用して作成。時間短縮
	生徒	本の選択	教員から与えられたものを読む	自分で好きな本を選んで読む。ブックリストにより選ぶ目安が与えられる
		読書記録	なし	ブックリストにより読書記録が容易になる
	司書教諭・図書館	英語多読用図書の貸出	英語多読用図書が借りられることはない	貸出冊数の増加
		図書館の活性化	貸出者率80%前後	貸出者率90%以上
図書館内授業		英語科の授業はなし	英語科の授業時間が増加	
第2サイクル	英語科教諭	指導の均一化	担当英語科教諭によって異なる	司書教諭がオリエンテーションを実施したり、授業内指導に加わることで均一化
		英語科教諭間の情報共有	他学年の状況を把握していないため、課題が重複して蔵書が足りなくなることがある	司書教諭をハブとして教科間の情報共有を図る
		司書教諭の役割理解	和書に関連したことが中心となる	業務が多岐に渡ることで、選書から授業支援まで行うことを認識
		信頼関係の構築	特に意識せず	英語多読や授業に関する相談を司書教諭にする。司書教諭を自分の不足分を補う存在として信頼
	生徒	読書習慣の形成	読書嫌いの生徒がいる	これまで和書を読まなかった生徒が和書も読むようになる
		学校図書館の利用方法	授業でしか利用しない場所という認識	読書や居場所として図書館を利用できる場所と認識
		司書教諭の役割理解	和書に関連したことのみを相談	休み時間などを利用して英語多読に関する読書相談や学習相談をするようになる
		英語力向上	長文への苦手意識	長文への苦手意識の払拭、モチベーションの向上・維持
	司書教諭・図書館	業務の軽減	オリエンテーションは年度ごとに交渉してホームルームや国語科の授業内に実施	英語科授業内で実施。年度ごとの交渉が不要になり負担軽減
		教科との連携授業	国語科、社会科を中心に連携	英語科教諭との関わりが増え、授業に関する相談を多く受けるようになる
		生徒の学校図書館、司書教諭への理解	和書に関連したことのみを相談。授業での利用のみの生徒もいる	読書、学習、居場所などで休み時間や放課後に来館する生徒の増加
		信頼関係の構築	信頼関係を構築する方法を模索	英語科教諭から相談を受けるだけでなく、英語科教諭にオリエンテーションの相談をするなど、相互に助け合う関係となる

【注・引用文献】

- 1) 酒井邦秀『どうして英語が使えない? : 「学校英語」につける薬』筑摩書房, 1993, 242p.
- 2) Richards, Jack; Schmidt, Richard W. Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics. 4th edition, Routledge, 2010, 656p.
- 3) 前掲1)
- 4) 古川昭夫は、『今日から読みます英語100万語! : いっぱい読めばしっかり身につく』(日本実業出版, 2003)内で、酒井の著書に感銘を受けた古川、神田みなみ、佐藤まりあらが100万語多読を普及させようと発足させたものがSSS英語学習法研究会(2001年創設、酒井退会後の2008年に英語多読研究会と改称)だと述べている。2004年にはSSS英語学習法研究会から多読学会が創設された。同年2月の『英語教育』では、酒井とは別に独自に英語多読の指導を実践してきた中学校、高等学校における実践報告も掲載されている。しかし、2004年以降の実践では、ほぼ必ずと言っていいほど、酒井が提唱した多読三原則について触れられるようになっていく。
- 5) 日本の英語多読に関しては論文が少なく、研究ノートやエッセイが多い。また、英語多読の導入経緯や歴史に関しては、小林めぐみ。多読の研究と実践: 過去、現在、そして未来; エッセイシリーズ「研究の未来」. 英文学研究. 支部統合号4, 2012.1, p.241-251. や、西澤一らの実践報告の一章、あるいは1項目として述べられているものがある。
- 6) 江竜珠緒。日本の中等教育における英語多読の広がり実践: 英語科教論と司書教論の連携に向けて。日本図書館情報学会誌. 2018, vol.64, no.3, p. 99-114.
- 7) 英語多読用図書とは、英語図書(英語で書かれた図書)のうち、学習用に編集されたものや、主に学習用に使用される非常にやさしい絵本、英米の小学生向けに書かれた図書を指す。
- 8) Nuttall, Christine. *Teaching Reading Skills In a Foreign Language*. Heinemann Education Books, 1982, 235p.
- 9) Krashen, Stephen. *The Power of Reading: Insights from the Research*. Libraries Unlimited, 1993, 119p.
- 10) Nation, Paul; Waring, Rob. "Extensive Reading and Graded Readers," *Reading Oceans*, 2013. http://www.readingoceans.jp/ComData/files/Paul%20Nation%20%20Rob%20Waring's%20ER%20Booklet_eng.pdf, (accessed 2019-06-15).
- 11) Day, Richard R.; Bamford, Julian. *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Cambridge University Press, 1998, 222p.
- 12) 酒井邦秀。快読100万語! ペーパーバックへの道: 辞書なし、とばし読み英語講座。筑摩書房, 2002, 309p.
- 13) 酒井邦秀監修, 古川昭夫, 河手真理子。今日から読みます英語100万語! : いっぱい読めばしっかり身につく。日本実業出版, 2003, 253p.・西澤一, 吉岡貴芳, 伊藤和晃。英文多読による英語運用能力の改善。電気学会研究会資料 FIE 2005, p.65-68.・西澤一。図書館の教育支援, 地域貢献: 豊田高専の英語多読を通して。平成18年度第1回東海地区大学図書館協議会研修会。東海地区大学図書館協議会誌. no.52, 2007, p.61-64.・古川昭夫。英語多読法: やさしい本で始めれば使える英語は必ず身につく。2010, 206p. など
- 14) 前掲6)
- 15) 文部科学省。第2章 第19節英語。高等学校学習指導要領 平成元年(1989)改訂版。 <https://www.nier.go.jp/guideline/h01h/chap2-19.htm>, (参照2019-07-26)。
- 16) 高瀬敦子。“ある私立高校での多読授業への挑戦”。酒井邦秀, 神田みなみ編著。教室で読む英語100万語: 多読授業のすすめ。大修館書店, 2005, p.82-89.
- 17) 高瀬敦子。英語多読・多聴指導マニュアル。大修館書店, 2010, 237p.
- 18) 酒井邦秀, 西澤一編著。図書館多読への招待。日本図書館協会, 2014, 186p.
- 19) 米澤久美子。“3.3 多読と学校司書の役割”。酒井邦秀, 西澤一編著。図書館多読への招待。日本図書館協会, 2014, p.54-63.
- 20) 西澤一, 米澤久美子, 栗野真紀子。NPO 多言語多読監修。図書館多読のすすめかた。日本図書館協会, 2019, x, 198p., (図書館実践シリーズ, 40)。
- 21) クルト・レヴィン。社会的葛藤の解決。末永俊郎訳。ちとせプレス, 2017, xviii, 233p., (社会的葛藤の解決と社会科学における場の理論, I)。
- 22) 佐野正之編著。アクション・リサーチのすすめ: 新しい英語授業研究。大修館書店, 2000, viii, 229p.
- 23) 兼重昇。教育実践学の未来: 教科教育実践学の概念と英語教育研究における理論と実践。兵庫教育大学教科教育学会紀要。2003, no.16, p.1-4.
- 24) 日本図書館情報学会研究委員会編。学校図書館への研究アプローチ。勉誠出版, 2017, 183p., (わかる! 図書館情報学シリーズ, 第4巻)。
- 25) 塩谷京子。“小学校図書館を対象とした実践研究”。学

- 校図書館への研究アプローチ。日本図書館情報学会研究委員会編。勉誠出版, 2017, p.93-111, (わかる! 図書館情報学シリーズ, 第4巻)。
- ²⁶⁾ ジャック・C・リチャーズとチャールズ・ロックハートも、アクション・リサーチの6プロセスについては、具体的な実施方法についてのみ記して、Hypothesis という文言は使用していない。Richards, Jack. C.; Lockhart, Charles. *Reflective Teaching in Second language Classroom*. Cambridge University Press, 1996, xii, 218p.
- ²⁷⁾ 文部科学省。高等学校学習指導要領(平成30年告示)。601p.
- ²⁸⁾ 明治大学附属明治高等学校。2019年度学年指導・学習指導年間計画表。2019。78p.
- ²⁹⁾ Graded Reader (GR) とは、Oxford、Cambridge など主にイギリスの語学専門出版社が出版している非英語圏での英語学習者向け段階別読みもの。学習者の年齢を高校生以上程度にしているため、リライト、オリジナル作品ともに成人の鑑賞に堪えうる内容のもので構成されている。近年ではネイションやワーキングの助力を得た韓国の語学専門出版社がGRの出版に力を入れるなど、大手の語学専門出版社はほとんどがGRのシリーズを持っている。
- ³⁰⁾ 前掲11)
- ³¹⁾ Williams, Ray. "Top ten' principles for teaching reading," *ELT Journal*. 1986, vol.40, Issue 1, p.42-45.
- ³²⁾ 三輪涼子。私たちの“森”をつくらう③。学校図書館。2016, 788, p.86.
- ³³⁾ 古川昭夫, 神田みなみ, 小松和恵, 畑中貴美, 西澤一。英語多読完全ブックガイド: めざせ1000万語!。コスモピア, 2005, 462p.
- ³⁴⁾ Oxford Reading Tree (ORT) は、Oxford社が出版している段階的な読みもののシリーズ。文字のないStage1から同じ登場人物たちが活躍し、徐々に語彙、文法レベルがあがっていく。各Stageは主たる登場人物を描いたMain Stories、脇役を主人公にしたMore Storiesなどに枝分かれしたツリー構造となっており、1話完結ながらすべての物語がゆるやかに重なり合っており、大きなひとつの物語世界を構築している点に特徴がある。各Stageの物語は通常6冊ずつで、すべてを読み通すためには300冊以上を読まねばいけないが、1冊は非常に薄いので、通常、高校1年次であればStage5程度までは苦もなく読み進められるものである。指導書やワークブックも発行されているため、ORTを用いた英語多読指導をしている学習塾や英語科教諭も多い。酒井、古川も率先してORTを推奨しており、日本の英語多読指導においては欠かせないシリーズといえる。
- ³⁵⁾ 江竜珠緒, 村松教子。明治高等学校における英語多読: 生徒の洋書選択についての考察。明高研叢。2012, no.11, p.75-95.
- ³⁶⁾ 秋田喜代美。“第5章 学校でのアクション・リサーチ: 学校との協働生成的研究”。教育研究のメソドロジー: 学校参加型マインドへのいざない。秋田喜代美, 恒吉僚子, 佐藤学編。東京大学出版会, 2005, p.163-183.
- ³⁷⁾ 前掲33)
- ³⁸⁾ 前掲17)
- ³⁹⁾ 前掲17)
- ⁴⁰⁾ 西澤一。図書館の教育支援, 地域貢献: 豊田高専の英語多読を通して。平成18年度第1回東海地区大学図書館協議会研修会。東海地区大学図書館協議会誌。no.52, 2007, p.61-64.
- ⁴¹⁾ 佐野正之編著。はじめてのアクション・リサーチ: 英語の授業を改善するために。大修館書店, 2005, x, 215p.

(平成31年3月29日受付)

(令和元年7月10日採録)